

●表面

いずれの作品についても本文を書き写す問題は「本文」と書かれたものを全て写す。(訳と書かれた箇所には波線部のみを現代語訳を記入すること。

誤字に注意

随筆の「随」・・・隋・髓とならないようにすること。

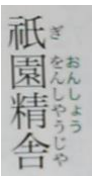
徒然草の「徒」・・・縦・従とならないようにすること。

誤読に注意

過客の「客」・・・教科書P 249 のふりがなを見ること。

※古典分野のレポートに取り組んでいると「現代仮名遣いで書きなさい」という問題が各所に出題されている。(例) 報告課題②裏面一。

慣れないうちは、教科書の歴史的仮名遣いの右横についた、「緑色のふりがな」を写してもよろしい。ただ、なるべく早く教科書P 252の[1]~[6]をマスターし、ふりがなを写す作業から脱却すること。



←「緑のふりがな」とはこれのこと「おんしょう」。教科書P 248参照

※竹取物語・・・竹取を職業にする人は、当時身分が低いとされていた。そこへ突然かぐわしい・輝かしい姫(かぐや姫)がやってくるという伝奇物語かぐや姫は月の世界で罪を犯し、地球へ流罪になったとされる。(しかし、地球でも5人の男性を翻弄する罪作りな行動に出ることになる。)

※枕草子・・・あけぼの(まだほの暗い時間帯)。あかつき(明け始め)と区別している。★三重県にはあけぼの学園高校も 暁学園高校もある。朝日が好きな県民性なのだろうか。

- ・秋は夕暮れ、冬はつとめて(早朝)が趣深いと続く。
- ・作者の清少納言の「清」は清原という姓の一部。父・元輔(もとすけ) 曾祖父(祖父)・深養父(ふかやぶ)も歌人として有名。

※方丈記・・・一丈(約3m)の正方形をした部屋で記した随筆。下賀茂神社に復元した建物がある。作者の鴨長明は姓からも賀茂神社の神官の家に生まれたことがわかる。住居はどうせ壊れるので質素 簡素なものがいいという住居論である。

※平家物語・・・平家は合戦で負けた方である。どうして負けた方の姓をつけたのか考えてみるのもおもしろい。

- ・冒頭文の「祇園」は京都の地名ではない。インドの寺院の名前を漢字で当てたものである。

※奥の細道・・・松尾芭蕉は弟子の河合曾良と二五〇日間の旅に出た。江戸から北陸を巡り、岐阜の大垣までの旅で、多くの俳句を残した。桃青という号を持つが、その名を持つ伊賀市の桃青中学校が統廃合でなくなったことは残念である。



●裏面

一、「現代仮名遣いで書きなさい。」という問題である。教科書P 253の五十音図のワ行の「ゐ」「い」「ゑ」を「ゐ」「ゑ」と書いたり、濁点のない古文に濁点を付けたら、小さく書かれていない「つ・や・ゆ・よ」を「つ」「や」「ゆ」「よ」と書いたりするものである。また、「すべて」とあるので、「人」「食」「音」「宇治拾遺物語」もひらがなにすること。

二、教科書P 250の下段にすべて説明されている。しっかりと読むこと。

三、レポートには「動詞の終止形がウ「u」の音になる形」と書いたが、ごく少数「u」の音で終わらないものもある。

・「あり」「をり」「はべり」「いまそがり」の四語については、「り」で終わる。現代語の感覚で、「ある」「をる」と言いたいところだが、注意すること。「ラ行変格活用」と言っ。

下に続く主な語	活用の種類	例語	未然	連用	終止	連体	已然	命令
	ラ行変格活用	あり	ら	り	り	る	れ	れ

【参考】は現代語としての「飲む」で語尾活用(変化)の練習問題に取り組みこと。普段の言葉遣いを書けばよい。

四、学習書の現代語訳 P 162 ～ 163 上段を参考に古語と現代語を対応させながら取り組むこと。

- ・つれづれ…「徒然草」の「つれづれ」に同じ。することがなく退屈な状態。
- ・おどろく…「びつくりさせる、びつくりする」の意味ではない。ことに注意する。
- ・たまへ…尊敬語の訳し方をする。目をお覚めになる。目をお覚めになる。
- ・たてまつり…謙譲語の訳し方をする。起こしてさしあげる。起こし申し上げる。
- ・な

【動詞】

そ…「な」と「そ」で挟まれた動詞を禁止する働きがある。「～するな。」

五、現代語の会話文でも、「○○○。」と言った。となることから分かるように、発言や思いの直後には「と」が記されるので、まずは「と」を探し、その前文を読んでみる。

六、学習書 P 164 ④上段に、学習書の編集者の考えが記されていますが、これを写してはいけません。

七、学習書 P 167 「理解を深めるために」を参考にすること。また、教科書 P 251 の下段の説明も合わせて読むこと。

☆レポートに掲載された部分だけではなく、教科書の本文は全て、自分で音読しておくこと。

P 246 各レポートのつづき部分(教科書掲載部分の最後まで)。ここまで自学自習し、左のように、ふりがなを付けられるようになるまで声に出して読んでおくこと。(カタカナは現代仮名遣いである。発音するときはカタカナに従うこと。)

・『竹取物語』…名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、①三寸ばかりなる人、いとつつくしうてゐたり。

・『枕草子』…夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

・『方丈記』…世の中にある、人と②栖と、またかくのごとし。

・『平家物語』…③おこれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。④猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

・『奥の細道』…舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。

- ①現在の長さの単位でいうと、何㎞。
- ②読めるようになっておこう。
- ③と④は対句の関係となっている。

☆レポートの『竹取物語』～『奥の細道』までは時代順に並んでいる。①並び方を覚え、②時代、③ジャンル、④作者名を一緒に答えられるようにしておく。